

2023 年度 卒業生答辞 加藤 光太郎

日を追うごとに暖かさを増していき、春の訪れを感じる季節となりました。私たち卒業生一同は、今日この日をもちまして、神奈川大学を卒業します。この学生生活の最後の節目に、このように盛大な卒業式を開催していただきまして心より感謝いたします。小熊学長をはじめとする先生方、ならびにご来賓の皆様にご臨席いただきましたことを、卒業生一同深く感謝申し上げます。

思い起こせば3年前、私は社会人編入学制度を利用して、本学2年次に編入学いたしました。それまで15年間従事していた建設業を辞め、学生に転身し人間科学を学ぶことは、私にとって大きな挑戦でした。建設業では、電気工事の現場代理人として従事しておりました。工事現場は生き物です。現場に対応するため、長時間労働や、様々な問題を迅速に解決することを求められる職場環境は、大きな心理的圧力を与え、同僚が入れ代わり立ち代わり休職するような状況でした。このような経験は、私に職場環境に対する重要な問いを投げかけました。人間にとって働きやすい環境とは何か、という問いを解決するため、人間科学、特に心理学を職場環境づくりに活かせないかと考え、再び学びの場に戻ることを決意しました。

大学生活は、単に知識を得る場ではなく、自己成長の場でもありました。私が入学した2年次は、コロナ禍の真っ只中で、通学が叶わない中、ほとんどの講義が遠隔授業となりました。この臨機応変な大学の対応によって、学ぶ機会が損なわれなかったことは、大変感謝しております。私たちは多くの制約を受けながらも、手探りながら新しい環境に適応することを学びました。その後、私は、公認心理師の養成プログラムを受講する機会を得ることができました。心理演習では、曖昧な状況を曖昧なまま受け止める消極的受容力の大切さを学びました。心理実習では、臨床心理の現場で2ヶ月間の実習を行いました。問題を解決することはおろか、現場では何もすることができない自分との戦いでした。この経験は、そこにある問題の本質とは一体何なのかということ深く考えるきっかけとなりました。建設業に従事していたときは、いち早く結論を出すことに終始しておりました。しかし学びの中で、問題から距離をおき、俯瞰し、冷静に分析し、その結果、分からないことは分からないまま受け止める大切さを改めて認識しました。複雑な事象は今すぐには分からないとしても、分からないものとして認知することが、興味を持って学び続けようとする動機になります。学びは一生続く旅であり、私たちはこれからも、社会の中で、そして個人として、絶えず成長し続ける必要があります。今日、私たちは卒業という大きな節目を迎えますが、これは終わりではなく、新たな学びの始まりです。

4月からは卒業生がそれぞれの道を歩んでいくこととなります。神奈川大学で身につけた教養、多くの出会い、培った経験は、現在の複雑な社会を生きていくための糧となるでしょう。そして、卒業生がそれぞれの形で、社会に貢献できるよう邁進してまいります。

最後になりましたが、ご指導くださった先生方、学びをサポートしてくださったティーチング・アシ

スタントと大学院生の方々、ともに切磋琢磨したゼミナールの仲間たち、陰ながら支えてくださった職員の皆様、そして絶えず私たちを支援してくださった家族、保護者の皆様、ならびにご多忙の折にご列席くださいました皆様に、卒業生を代表して心よりお礼申し上げます。この会場にいる卒業生にも、それぞれに感謝を伝えたい方々がいらっしゃると思います。この場を借りて、心より謝意を表したいと思います。ありがとうございました。

結びに、神奈川大学のさらなる発展と、ここにお集まりいただいた皆様方のご健康とご活躍を祈念し、答辞といたします。

2024年3月22日

卒業生代表

人間科学部 人間科学科 加藤光太郎